

防災に関する教育／防災を通じた教育

京都大学防災研究所
矢守克也

1. 「防災についての教育」から、「防災を通じた教育」への転換を。
2. 自分の身を守る教育（「助かる教育」）だけでなく、下級生や立場の弱い人を思いやる教育（「助ける教育」）も。
3. 災害や防災だけ取り上げるのではなく、さまざまな教科学習とのつながりの中で。
4. 「自然の猛威」（だけ）ではなく、「人生」、「生き方」、「家族」の問題として。
5. 防災＝「敵（ハザード）を知り、己（人間）を知る」
6. 知識・スキル・習得・正解→参加・協働・ジレンマ・コンフリクト・発信・成解
7. 地元（地域・町）で起きた出来事や施設を重視。阪神・淡路大震災（1995年）、大阪府津波・高潮ステーション（阿波座）、京大防災研阿武山地震観測所（高槻）、人と防災未来センター（神戸市）

8. 地域と地域のつながりを通した防災教育。地域性が似ていれば対策も似る。いざというときは助け合いのパートナーに。「被災地・未災地のリレー」(橋渡し)
9. 学校だけでなく、地域住民、行政、民間など全体で。
10. 継続性。1回、1年限りの単発の学習、イベントではなく、大人から子どもに。先輩から後輩に。高学年から低学年に。「十年続けなさい」
11. 教育・学習という営みをもつ根源的なパラドックスにも配視を→「教える／学ぶ」から「一緒にする」へ：
(体系的に)教えれば教えるほど.....教える者と教えられる者を分断し、教えるに値する者とそうでない者を作り(資格、エキスパート)、教える者をアクティブに、教えられる者をパッシブにし(過保護と過依存、贅沢なリスク・情報待ち)、教えるに値する内容とそうでない内容(標準カリキュラム)を浮上させる

12. Think Practically, act theoretically: 理論と実践の両翼を極大化(中途半端な融合はNG、アカデミックに一級品の仕事と、徹底して当事者に向き合うことと)